http://alce.jp/journal/ 第22巻（2024）pp. 253 - 260 ISSN：2188-9600

Studies of Language and Cultural Education SLCE 言語文化教育研究 発行・編集 言語文化教育研究学会 ALCE Association for Language and Cultural Education

フォーラム

場のデザインという受け入れ校研究と言語文化教育研究の方法論的接点

［書評］神崎真実（2021）『不登校経験者受け入れ高校のエスノグラフィー』

小幡 佳菜絵*（Tsinghua University）　権野 禎（お茶の水女子大学大学院）　小澤 伊久美（国際基督教大学）

概要

本稿は，神崎（2021）の要点を整理したうえで，市民性・批判性・生態学的アプローチという3つの観点を手がかりに，言語文化教育研究への示唆を検討する書評である。本書は，マイクロ・エスノグラフィーによって，不登校経験者「受け入れ校」2校における，教員たちの日常的実践を帰納的に分析している。具体的には，教育実践に日常的に揺らぎが生じつつも，教員たちの不断の営為・記号配置によって，生徒たちの「居場所」が動的に生成される過程が明らかにされている。「場のデザイン」という方法論に根ざす，受け入れ校のこのような支援のありようは，市民性・批判性・生態学的アプローチの考え方を実践へと有機的に導く際の実例として，言語文化教育研究に示唆を与えうる。また，本書は，生徒の学力・能力保証を追求する学校的機能と，自己充足的な時間によって特徴づけられる居場所的機能が共存しうる，生徒全体に対する学校全体の支援の具体的実像を，文化心理学の視角から呈示している。

キーワード：文化心理学，居場所的機能／学校的機能，市民性，批判性，生態学的アプローチ

Copyright © 2024 by Association for Language and Cultural Education

1. 不登校経験者「受け入れ校」のフィールドワークが示す「場のデザイン」

神崎（2021）は，文化心理学に拠りつつ，不登校経験者「受け入れ校」2校を対象としたマイクロ・エスノグラフィーをとおして，教員たちが，生徒の「居場所」を不断にデザインし，生成し続けることで（p. 195），生徒全体を学校全体で支援することを試みる，教員たちの視点・方法論・日常的実践を描いている。本書における「受け入れ校」研究では，不登校等を個々の生徒の内在的問題として捉え，個々の教員によって解決を目指す，個別の診断にもとづく支援のありようとは異なり，教育実践の揺らぎが日常的に発生しながらも，教員たちの不断の営為・記号配置によって，場が動的に「平衡状態」に向かい（p. 36），生徒にとっての「居場所」がつくられる過程が明らかにされている。

本書でフィールドとする「受け入れ校」は，具体

* Eメール：xfjch19@mails.tsinghua.edu.cn

的には，「不登校経験者や中途退学者を入学試験の時点で排除してしまうことなく，生徒の支援ニーズに応えようとする高校」と定義される（p. 7）。本稿では，このような受け入れ校を研究対象とする，本書の要点を整理したうえで（第2節），本書の言語文化教育研究への示唆をより明確化するため，言語文化教育研究学会が掲げる，市民性・批判性・生態学的アプローチの各観点を手がかりとし，本書の研究意義を検討する（第3節）。本書を介して受け入れ校の実像を知ることは，わたしたちが再生産しがちな，特定の学校機関での生活経験を基盤とする，質保証等の「学校的機能」に突出したステレオタイプ的学校像や（p. 207），特定の学校機関においては十分に適応できなかった子どもを問題視する言説などを，見直す機会ともなるだろう。ことばと文化の教育実践の多くが学校機関で実践されている以上，言語文化教育研究の文脈においても，本書は意義をもつと考えられる。

2. 本書の要点

2. 1. 第一部・第二部の要点：問題の所在および研究課題・目的・方法

本書は，計六部から構成される。第一部では，背景となる問題の所在，および，本書で詳述される一連の研究に通底する研究課題と目的が共有され，第二部では方法が示される。

現在の日本の高校教育は，3種類の課程，つまり，全日制高校・定時制高校・通信制高校に大別される。このうち，大部分の全日制高校では，適格者主義にもとづき，入学試験によって，「低学力者」や「不登校者」が排除される傾向がみられる（p. 5）。このような状況のもと，受け入れ校は，不登校経験者や中途退学者など，現行の教育制度に十分適応しきれず，学校機関から離脱した経験のある子どもたちに，学習と社会進出の機会を提供する役割を担う。従来，このような受け入れ校は，「教育困難校」というラベルのもと，学級崩壊等の「問題」とともに捉えられる傾向があった（p. 6）。しかし，本書では，制度面など多面的に制約を抱えつつも，多様な背景をもつ子どもたちの多様なニーズを引き受け，蓄積されたノウハウとともに支援と指導の両立を目指す，受け入れ校の教員たちの視点・方法論に，積極的意義を見出している（第1章）。

上記のような問題意識のもと，不登校経験者や中途退学者の支援・指導を扱った先行研究を確認してみると，日本社会における不登校・学校不適応およびその支援に対する，理解の変化のありようもみえてくる（第2章）。具体的には，「学校恐怖症：School phobia」などに代表されるように，「学校に登校しないこと」を病理的に捉え「なぜ学校に行かない・行けないのか」を問う研究主題から，「不登校は誰にでも起こりうる」という認識のもと，「何が登校を支えるのか」という主題へと力点が移ってきた。こうした昨今の学校適応研究のもとでは，生徒たちの学校での「居心地の良さ」「適応感」に，主に焦点が当てられている。また，支援に関しては，行動分析に基づく包括的支援アプローチなど，データを用いたシステマティックな介入方法が，これまで提案されてきた。

これらの知見をふまえ，本書は，文脈による意味を注視する解釈的アプローチに根ざした，マイクロ・エスノグラフィーを研究方法として採用し，受け入れ校2校（通学型通信制単位制高校・全日制単位制高校）における，教員の日常的実践を丁寧に描き出す（第3章；第二部第4章）。その際，本書は，従来の研究とは異なり，「少人数の不適応－大多数の適応という構図」を前提とした（p. 28），「問題」のある生徒に対する個別の教育実践・支援方法に，主眼を置くことはしない。それに替え，本書は，学校教育における「居場所的機能」と「学校的機能」の

両側面に着目し，「場のデザイン」を中心に，高校の教育目標も参照しつつ，生徒全体を支援する教員たちの視点・方法論・日常的実践を主題としている。この点に，先行研究と対置したときの，本書の独自性・意義があるといえるだろう。

2. 2. 第三部から第五部の要点：受け入れ校2校を中心とした研究結果

第三部から第五部では，受け入れ校2校を対象としたフィールドワークを中心に，研究の軌跡・結果が丁寧に編まれている。第三部では通学型通信制単位制高校を（第5, 6章），第四部では全日制単位制高校を（第7～9章），それぞれフィールドとした研究結果が整理されている。続く第五部では，受け入れ校を高校教育という文脈に広く位置づけ，設置者・教育課程・偏差値によって類型化された各高校群が，個性化・多様化と学力の質保証という2つの社会的要請に対して，それぞれどのように責任を果たそうとしているのか，という問いが帰納的に検討されている（第10章）。具体的には，ここでは，校長の挨拶文のテキストマイニングにもとづく，学校教育目標の内容分析の結果が示されている。本稿2. 2. では，2校のフィールドワークの研究結果（第三部および第四部）を中心に，要点を以下に呈示する。

第三部で描かれる，通学型を採用する私立通信制単位制高校（以下，A高校）でのフィールドワークでは，約1年間の全体観察をふまえ，「生徒が職員室へ頻繁に訪問・滞在をしている現象」が焦点化されている（p. 75）。この観察視角のもと，(1) 教員による，職員室での生徒指導の具体的ありよう，(2) 職員室での交流による，教員・生徒双方にとっての利点が，研究課題として検討される（第5章）。従来の学校像では，職員室は文字どおり「教員のための場」であり，彼らの休息時間の確保・生徒に関する情報の機密性担保などを目的に，生徒からは「閉ざされた場」として理解される傾向がある。しかし，通信制でありつつも通学型を採用するA高校では，多様な支援ニーズを抱える生徒の「（一時的な）居場所」ともなるように職員室を開き（p. 67），ホームルームなど特定のルーティンがないなかでも，教員全体で生徒指導を成立させ，生徒を支える場として，職員室が機能している。このようなA高校教員による時空間のデザインは，学習の標準化や時限主義に代表される，従来の「学校式教育」をも反省的に見据えた（p. 80），「回避される教育モデル」との緊張関係において（p. 92），実践されているといえる（第6章）。

一方，第四部では，従来，不登校経験者等の「受け入れ」の役割を主に担ってきた，定時制や通信制の高校ではなく，全日制単位制を採用する受け入れ校（以下，B高校）に焦点が当てられている。B高校における支援の特徴は，「誰も排除しない」という理念のもと（p. 157），教員のほか，ボランティアコーディネータ（対人援助職者）・大学生ボランティアなど多様な人的資源や，ボランティアが常駐するオープンスペースという物理的資源・空間を有機的に結びつけ，生徒の多様な居方を保障する，「場のデザイン」および生成という不断の営為にある（第9章）。ここでは，たとえ教員と生徒の間に緊張関係や，それに伴う支援の揺らぎが生じたとしても，ボランティアが生徒の味方役を担うなど，間接的に生徒を支援する豊富な資源によって，生徒への指導上の見立てに未定性を担保しつつ，多角的な理解を目指した支援が実践されている（第7章）。また，仮にボランティア当人が，生徒に何かを与える「支援者」のイメージにとらわれ，自身の役割に不全感を経験したとしても，コーディネータの助言によって，「生徒とともにいること」の価値づけがより促されるなど（p. 136），生徒全体に開かれた状態をつくり続ける支援のありようが目指されている（第8章）。つまり，多様な人材が相補的に役割を担うことで，不登校等の問題を生徒個人に帰属させる，従来の診断的

文化から脱却し，生徒の多角的理解のもと，生徒の学級復帰と関係性の拡がりを目指す，場全体による支援が，B 高校では取り組まれている。

2. 3. 第六部の要点：総合考察

2. 2. で概括した研究結果をふまえ，第六部では，「場のデザイン」としての支援という概念を中心に，文化心理学の観点から本書の総括がなされる。具体的には，フィールドワークの結果をもとに，受け入れ校2校において，次の3種類の支援が，動的に成り立つ過程が分析されている：(1) 職員室やオープンスペースを中心に，生徒という役割に必ずしも規定されずに，生徒が無理なくその場に「居（られ）ること」の支援，(2) 生徒の時間感覚を尊重しつつ，生徒とともに課題に向き合うという「向かうこと」の支援，(3) 学内・学外の多様な人材や活動との関係づくり・接続をとおして，生徒が「社会と出会うこと」を促す支援。このような受け入れ校の「場のデザイン」としての支援では，言語に依拠した密な関わりや信頼関係に力点を置きすぎることなく，生徒の身体と環境との関係性をも考慮に入れながら，「注意を向けすぎない・関わらない時空間を保障すること」も同時に目指されている（p. 207）。

また，第六部では，従来対置されてきた，「居場所的機能」と「学校的機能」が，「場のデザイン」としての支援によって，学校においても共存する可能性が示唆されている（p. 207）。本書では，矢守（2016）を参照しつつ，居場所的機能に「コンサマトリー Consummatory」，つまり，自己充足的かつ「直接・享受的」な時間のありようを，一方，学校的機能に「インストゥルメンタル：Instrumental」，つまり，「媒介・手段的」な時間の性質をそれぞれ対応させ，考察が進められている。本書が描く「場のデザイン」としての支援という方法論に根ざす，受け入れ校の日常的実践は，コンサマトリーな時間を過ごすという居場所的機能と，生徒の学力・能力の質保証や社会進出の促進といった，インストゥルメンタルな時間のありかたに特徴づけられる学校的機能が，共存する場生成としての教育実践の可能性を呈示している，といえよう。

3. 言語文化教育研究に対する，本書の示唆・意義

3. 1. 3つの観点の選定による，言語文化教育研究と本書の接点の明確化

本稿3. では，言語文化教育研究と本書の接点をより明確化するため，言語文化教育研究学会（n.d.，以下，ALCE）が掲げる，市民性・批判性・生態学的アプローチという3つの観点を手がかりとして，本書の示唆・意義を検討する。その際，ALCEによる各観点の解釈に依拠しつつ，分析を試みる。ALCEに拠れば，市民性とは，多様な文化的・言語的背景をもつ人々が共在する社会において，「より社会包括的な場や市民の意識を形成する」ことを目指した，言語文化教育研究の方向性を指す。次に，批判性とは，コミュニティのよりよい未来創造のため，既存の政治経済的・社会的・歴史的枠組みの捉え直しを促す，言語文化教育研究の方向性を意味する（ALCE）。最後に，生態学的アプローチとは，言語文化教育研究を考える際に，ヒト・コト・モノの相互連関に力点を置く視座を指す（ALCE）。これらの考え方を手がかりに，本書から得られる，言語文化教育研究への示唆・意義を，以下の節で検討していきたい。

3. 2. 市民性に関する本書の示唆・意義

市民性に関して，本書は次の2点を示唆している。第一に，受け入れ校の存在・具体的実践を知ることそれ自体が，より社会包括的な視座を読者がもち，

市民性を形成することに繋がる，と考えられる。受け入れ校の存在は，ともすると，全日制学年制高校など日本の学校教育の典型とされる事例や，それにもとづくプロトタイプ的学校像から，距離があるもののように一見感じられる。また，不登校経験者や中途退学者に対する，日本社会におけるスティグマの存在を否定することは難しいだろう。このように，多くの市民にとって，具体的に実態を把握することが難しいと思われる受け入れ校に関して，本書は，マイクロ・エスノグラフィーをとおして，受け入れ校の日常の「文脈の中で展開・変容していく行為」を，丁寧に描出する（p. 33）。その結果，本書だからこそ感じとることのできる，受け入れ校の日常の「息づかい」が紡ぎ出されている（p. 207）。受け入れ校の存在・日常的実践が，本書をきっかけにより広く認識されることで，より多くの子どもたちが「適応的に学ぶ機会」を創出することにも，接続すると思われる（p. 13）。

第二に，受け入れ校における，学内・学外の多様な人材や活動との関係づくり・接続を図る，「場のデザイン」という方法論にもとづく実践・支援そのものが，言語文化教育の実践にも示唆を呈示すると考えられる。例えば，本書の研究対象であるB高校では，大学生ボランティアなど，教員とは異なる役割を担う人材を学外から招き入れることで，生徒が「社会と出会うこと」を促す「場のデザイン」が動的に実践されている（p. 200）。3. 4. でも後述するように，教員と生徒を中心とした個別の関係性に限定されることなく，学校内という社会・学校外という社会との，より多面的な接続を目指す，有機的な「場のデザイン」および，その実践だからこそ，社会のなかで生きる市民意識の形成も促される，と考えられる。

3. 3. 批判性に関する本書の示唆・意義

批判性に関しては，本書で考察される「場のデザイン」としての支援のなかでも，とりわけ，「支援－被支援の関係」にとらわれすぎずに，生徒が無理なく学校のどこかに「居（られ）ること」の支援に着目したい（p. 197）。2. 3. で言及したように，本書のフィールドワークの結果は，従来対置されてきた，居場所的機能と学校的機能が，「場のデザイン」としての支援によって，学校においても共存しうる可能性を示唆している（p. 207）。このように居場所的機能をも包摂しうる，「場のデザイン」としての支援のありようは，「学校だからといって学校的機能だけで運営されているのではない」という気づきとともに（p. 207），読者であるわたしたちが抱きがちな，学校の機能に対する想定や期待を見直す視座を提供してくれる。

例えば，A高校の場合，職員室は，生徒にとって，従来わたしたちが抱きがちな学校像とは異なり，事務手続きを遂行する機能のみに限定された場所ではない。そこは，学校生活を充実させたいという想いを抱きつつも，その具体的方法を自力では導きにくい状況にある生徒にとって，「避難場所」であり，同時に，教員との対話をとおして「学校生活をよりよくする場」でもある（p. 67）。また，複雑な家庭状況を背景にもつ生徒にとっては，下校前の「一息つく場」として，居場所的機能を有している（p. 67）。

同様に，B高校の場合も，「誰も排除しない」という理念のもと，多様な人材が相補的に協働し，ボランティアが常駐するオープンスペースを生徒全体に開き，さらに，「生徒に注意が向きすぎることなく，放置もしない」という記号を配置することで（p. 197），学校内における生徒の多様な居方を，学校という場全体をとおして保障している。このように，受け入れ校2校の日常的実践の可視化は，学校における居場所的機能の再考を促すといえよう。

3. 4. 生態学的アプローチに関する本書の示唆・意義

本書で研究対象とする受け入れ校では，職員室やオープンスペースなど，学級以外にも，生徒が「居る」ことを保障された空間が拡張している。このように学校全体に拡がる「場のデザイン」は，ヒト・コト（本書の場合，とりわけ記号）・モノという三者を，有機的に連関させ，適切な場所に布置することで実践される。具体的には，(1) 生徒の直接的支援・指導を中心的に担う教員に加え，大学生ボランティアなど，学外の領域とも広く接続をもち，教員とは異なる役割を担う人的資源（ヒト），(2) 従来，教職員のみの閉鎖的空間と捉えられがちである職員室の開放（A 高校）や，生徒全体に開かれた空間としてのオープンスペースなど（B 高校）を含む，物理的資源（モノ），(3) コンサマトリーな時間や「居（られ）ること」の肯定・「誰も排除しない」という理念をはじめとする，メッセージ（記号・コト）を指す。このように実践される「場のデザイン」という方法論は，ある活動への参画に対する生徒の欲求は，その行為を可能とするモノやコトなどの「道具との関係」から発生する（p. 201），という考えにも支えられている。このように，受け入れ校における，場全体による有機的かつ動的な支援のありかたに，生態学的アプローチとの接点を見出すことができるだろう。

3. 5. 総括：「受け入れ校」研究の，言語文化教育研究への示唆・意義

本稿では，本書の要点を確認したうえで，ALCE が掲げる市民性・批判性・生態学的アプローチを手がかりに，本書から得られる，言語文化教育研究への示唆・意義を検討した。3. 2. から 3. 4. の議論にみられるように，本書のフィールドワークの結果は，受け入れ校2校において，「場のデザイン」という方法論にもとづく，学校全体による生徒全体への支援が，具体的にどのように動的に成立するのか，その日常的実践を文脈とともに呈示している。

このように，マイクロ・エスノグラフィーにもとづき，受け入れ校の教員たちの視点・方法論・日常的実践を可視化することは，ALCE が掲げる3つの観点を具体的実践へと導く際に，有用な示唆を提供するだろう。ここでの方法論によると，開かれた職員室やオープンスペースといった空間（モノ）さえ用意すれば，生徒の多様な居方や居場所が無条件に保障され，「場のデザイン」が成立するわけではない。また，ボランティア（ヒト）さえ配置すれば，生徒の支援が自動的に完了するというわけでもない。受け入れ校2校における，本書のフィールドワークの結果では，モノ・ヒトを単に用意するだけではなく，「生徒に注意が向きすぎることなく，放置もしない」，「生徒の課題に一緒に向かう」，「生徒が様々な価値観をもった人と関わる」などの記号（コト）が，モノ・ヒトとともに，動的に・有機的に結びつくことで，「場のデザイン」が不断に実践される過程が，具体的に呈示されている（生態学的アプローチ）。

また，本書が描く，受け入れ校における「場のデザイン」という方法論・日常的実践の実像を知ることは，学校における居場所的機能の再考をも促すと考えられる（批判性）。ここでは，居場所的機能の価値を盲信する危険性には留意しつつ，「居場所づくり」のより拡張的な理解も，今後の研究課題としてさらに求められるだろう（神崎，橋本，2023）。総じて，居場所的機能と学校的機能の共存可能性をも示唆する，本書の受け入れ校研究は，多様な背景をもつ市民としての学習者が，疎外感を経験することなく，学びや社会により向き合うためには，どのような支援が必要なのかという，社会包括的眼差しから，その実例を丁寧に示している（市民性），といえるだろう。

謝辞　本稿の執筆に際し，貴重なコメントをいただ

きました，本書著者の神崎真実先生に厚く御礼申し上げます。また，本稿の執筆に際して開催した読書会では，本書の解釈に関する豊かな洞察を得ることができました。読書会にご参加くださった皆さまに，心より感謝申し上げます。

文献

神崎真実（2021）.『不登校経験者受け入れ高校のエスノグラフィー――生徒全体を支える場のデザイン』ナカニシヤ出版.

神崎真実，橋本あかね（2023）. 文献レビューを通した居場所理解の拡張――「休息が織り込まれた場」から「自己理解に根ざした活動」へ『対人援助学研究』14，44-57.

言語文化教育研究学会（n.d.）.「言語文化教育研究学会とは」. https://alce.jp/aboutus.html（2024年2月26日閲覧）

矢守克也（2016）. アクションリサーチの〈時間〉『実験社会心理学研究』56，48-59. https://doi.org/10.2130/jjesp.si2-4

http://alce.jp/journal/ vol. 22 (2024) pp. 253 - 260 ISSN : 2188-9600

Studies of Language and Cultural Education SLCE 言語文化教育研究 発行・編集 言語文化教育研究学会 ALCE Association for Language and Cultural Education

Forum

Methodological intersection of "place" design between non-attendance research and studies of language and cultural education:

[Book review] Mami Kanzaki (2021), *Ethnography of high schools that accept students experienced non-attendance*

OBATA, Kanae*
Tsinghua University, Beijing, China

GONNO, Sachi
Ochanomizu University, Tokyo, Japan

OZAWA, Ikumi
International Christian University, Tokyo, Japan

Abstract

This book review summarises the main points of Kanzaki (2021) and examines their implications for studies in language and cultural education through three perspectives: citizenship, criticality, and ecological approach. Employing microethnography, this book inductively analyses the daily practices of teachers in two schools that accept students who have experienced non-attendance. Specifically, the study reveals how teachers dynamically create "a place for rest and social connection ('ibasho' in Japanese)" for these students through adaptive actions and symbolic arrangement on a daily basis. This form of educational support discussed in this book, grounded in the "place ('ba' in Japanese)" design methodology, offers valuable insights into studies of language and cultural education by illustrating the practical application of citizenship, criticality, and ecological approaches. Moreover, this book provides a concrete example of school-wide support for all students from a cultural psychology perspective. The study illustrates compelling cases where instrumental functions, aimed at ensuring students' competence, can coexist with consummatory functions, characterised by self-sufficient time, without overemphasis on the former.

Keywords: cultural psychology, consummatory function/instrumental function, citizenship, criticality, ecological approach

Copyright © 2024 by Association for Language and Cultural Education

* *E-mail:* xfjch19@mails.tsinghua.edu.cn